

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界（その4 「昆虫館」の音楽）

昆虫芸術研究家

柏田 雄三（かしわだ ゆうぞう）

「インセクトリウム」は昆虫を展示する施設で「昆虫館」などと呼ばれる。音楽の世界には虫を描いた<インセクトリウム>という曲がある。

デンマークのルーズ・ランゴ（1893～1952）の<インセクトリウム>は9曲合せてわずか9分強のピアノ曲集で、CDの解説書には学名、デンマーク語、英語で虫名が記されている。学名と和訳を記し（学名の一部の誤りはそのまま記載）曲を聴いた感想を記す。

Forficula Auricularia（ハサミムシ）：鋏を振りかざし敵を威嚇する。

Acridium Migratorium（トノサマバッタ）：ウロウロ歩き回る。

Melonetha Vulgaris（コフキコガネ）：翅の音を立てて飛び回る。

Tipula Oleraca（ガガンボ）：飛ぶ様子がひよろひよろと頼りない。

Libellula Depressa（トンボ）：翅を高速で動かして飛ぶ。

Anobium Pertinax（シバンムシ）：木材の中を動きながら音を立てる。

Musca Domestica（イエバエ）：飛んではあちこちに止まる。

Julus Terrestis（ヤスデ）：脚の運びが流れるようだ。

Culex Pipens（イエカ）：痢に障るような音で飛ぶ。

<イエバエ>ではピアノに手を入れて弦を鳴らす特殊奏法が使われている。

ドイツのアンドレアス・ヴィルシャー（1955～）の<インセクトリウム>は全12曲からなるパイプオルガン曲である。曲から昆虫の気持ちを推察しよう。

Hornissen（モンズズメバチ）：今日も獲物を目指し方角を変えて飛ぶぞ。

Raupe（イモムシ）：老齢で体が重い。成虫になる日が待ち遠しい。

Biene（ミツバチ）：忙しく飛び回り、仲間に蜜源の場所を知らせよう。

Glühwürmchen（ホタルの幼虫）：暗がりのをのそのそ歩いてみるか。

Schnarrheuschrecke（キチキチバッタ）：気紛れに跳んではみたが、めまいがした。

Zitronenfalter（キチョウ）：暗いところから日向に出て少し飛んでみるか。

Spitzmäuschen（ホソクチゾウムシ）：脚を最大限回転して食べ物を探しまわるぞ。

Trauermantel（キベリタテハ）：葬式に参列するのだ。重々しく飛んで行こう。

Sandflöhe（スナノミ）：ちょこまかと動き回るぞ。

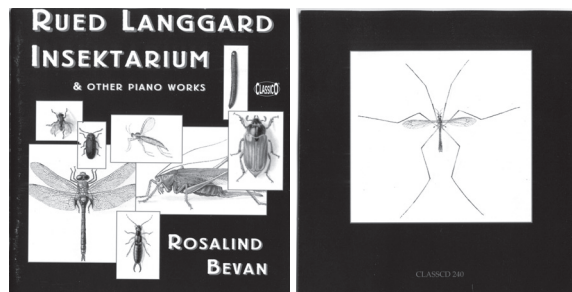
Waldameisen（ヤマアリ）：隊列を組んで食べ物探しに出るが見つかるかなあ。

Mondvogel（キモンクロシャチホコ）：我ながら人に好かれない姿だ。

Kartoffelkäfer（コロラドハムシ）：美味しいパレイシヨの葉をどんどん食べるのだ。

フランスのジャン・フランセ（1912～97）にもチェンバロ曲<インセクトリウム>がある。

先ごろ兵庫県の佐用町昆虫館を訪ねる機会があった。竹田真木生作詞、山本郁夫作曲の「子どもとむしと『昆虫館の歌』」の歌詞が壁に貼られていて、当日の館長である三木進さんがよい喉で歌って下さった。親しみやすい展示や歌を通じて虫好きの子供が増えればよいなと思いつつながら昆虫館を後にしたのだった。



ランゴ インセクトリウム
CLASSICO CLASSCD240